

島 根 文 芸
5 0 年 の 歩 み

島 根 県 文 芸 協 会

50年を振り返って

<短歌>

1. 島根県短歌界の動静

県の推奨による県文芸協会の年間活動として長い歴史を刻む島根県民文化祭の(1)文芸作品公募(文芸誌『島根文芸』)(2)しまね文芸フェスタ部門別交流会「島根県総合短歌大会」、並びに県短歌連盟自体の文芸活動としての歴史を持つ(3)『年刊歌集』の刊行に関わって、これらに応募し、出詠された状況を、島根県文化国際課の資料、並びに島根県短歌連盟の「理事会代表者会議案書」及び「短歌連盟会報」等の数字資料によって一見し、判断の材料としてみたい。

「島根文芸30年の歩み」において県短歌界の諸状況を、当時の島根県短歌連盟理事細田悦子氏が平成9年ごろまで述べておられるので、今回は主としてそれ以降の状況を述べる。

(1) 『島根文芸』公募への応募点数の年次的変化(島根県文化国際課資料)

1年ごとの実数を挙げたいが紙面の都合で4～5年ごとの平均値に留める。

平成 元～ 4年の平均	698(首)	→	最多年	742(首)
平成 5～ 9年の平均	628(首)	→	最多年	680(首)
平成10～14年の平均	583(首)	→	最多年	616(首)
平成15～19年の平均	506(首)	→	最多年	603(首)
平成20～24年の平均	430(首)	→	最多年	512(首)
平成25～29年の平均	337(首)	→	最多年	385(首)

(2) しまね文芸フェスタ部門別交流会「島根県総合短歌大会」への応募数(1人1首)(短歌連盟資料)

平成15～19年の平均	123(首)	→	最多年	151(首)
平成20～24年の平均	102(首)	→	最多年	117(首)
平成25～29年の平均	115(首)	→	最多年	155(首)

(3) 島根県短歌連盟『年刊歌集』への参加者数(短歌連盟資料)

平成15～19年の平均	382(人)	→	最多年	399(人)
平成20～24年の平均	322(人)	→	最多年	359(人)
平成25～29年の平均	256(人)	→	最多年	271(人)

(4) 島根県短歌連盟会員数(短歌連盟資料)

平成15～19年の平均	409(人)
平成20～24年の平均	320(人)
平成25～29年の平均	230(人)

(5) 資料に表れた数字からの一考察

上記（１）（３）（４）の数的資料を見る限り、平成に入ってから３０年間の短歌界の状況は、目に見えて下降気味であると言える。しかし、（２）の県総合短歌会への参加者数には大きな変動はなく、会場の場所、交通事情、講演内容等によって年々の数的変動はあろうが、（２）に関する限り短歌に対する関心の下降現象は見られないと言ってもよかろう。新聞文芸欄等への投稿も盛んな状況である。全人口の減少に伴い短歌に関わる人の数の減少するのはやむを得ないが、数的減少に悲嘆するのではなく、むしろ発奮剤として、短歌を通し心的向上に励むとともに、新入会員を進んで勧誘するなど短歌界の発展に誰もで力を合わせ、短歌文芸の創作活動の一層の興隆発展に努めたい。

２．過去２０年間に島根県内短歌関係機関で主管した行事

（１）しまね文芸フェスタ全体会講師招聘（島根県短歌連盟担当）

馬場あき子先生（平成１０年）演題「言葉で表現された人間」

尾崎左永子先生（平成１４年）演題「源氏物語の恋とくらし」

永田和弘先生（平成１９年）演題「短詩型による家族と時間」

三枝昴之先生（平成２４年）演題「短歌千三百年の魅力」

伊藤一彦先生（平成２９年）演題「表現のよろこび」

（２）日本歌人クラブ中国ブロック研修会（同クラブ島根県支部担当）

平成１０年（５月２３、２４日）藤岡武雄会長講演・歌会（島根県民会館）

平成１５年（１０月１８、１９日）神作光一氏講演・短歌大会（浜田市いわみーる）

平成２０年（１１月３０日、１２月１日）出詠数５７０首、出席者数１０５名（松江市ホテル白鳥）

平成２５年（６月１７、１８日）出雲の古事記ゆかりの地研修（大東町海潮・山水館）

平成３０年（６月１０、１１日）石見銀山と人麻呂の足跡探訪（江津市リゾート風の国）

３．慶弔（島根県短歌連盟会報より）

永瀬翠明様 平成１０年７月１日１８日逝去 島根県短歌連盟顧問

野津佐千穂様 平成１１年１２月１９日逝去 島根県短歌連盟顧問

渡部幽棲様 平成１５年８月２８日逝去 平成１４年島根県各種功労者表彰受賞・島根県短歌連盟顧問

高橋久一様 平成１６年１月１３日逝去 島根県短歌連盟事務局長

木村 哲様 平成１６年１月３１日逝去 木村哲ふるさと文学賞主催

渡部鯨舟様 平成１８年８月逝去 皇居にて詠進歌受賞

小原幹雄様 平成２０年５月２５日逝去 島根県短歌連盟顧問

鉦川兼光様 平成２１年２月４日逝去 島根県短歌連盟顧問

細田悦子様 平成23年3月31日逝去 島根県短歌連盟参与
加藤嘉昭様 平成25年11月14日逝去 平成24年島根県各種功労者表彰受賞・
島根県短歌連盟顧問

落海とし子様 平成25年2月5日逝去 島根県短歌連盟参与
黒崎行雄様 平成28年3月29日逝去 島根県短歌連盟監事
水津正夫様 平成28年6月20日逝去 島根県短歌連盟理事長
新免君子様 平成30年1月24日逝去 島根県短歌連盟参与

上記先達の皆様を始め、島根県短歌界のためご尽力賜った皆様に深甚な謝意を表します。

誌面の制限上、歌集出版紹介など掲載できませんので、短歌連盟会報に譲ります。

島根県短歌連盟 西 基宜

<俳句>

平成9年に久屋三秋氏によって現状が述べられているのでそれ以降に付いて記す。

島根県俳句協会は昭和47年設立以来、協会会報「俳句しまね」を年四回、合同句集「しまね俳句」を5年周期で発刊し第8集を平成30年2月に発刊した。

平成13年度版、協会30周年記念事業での合同句集（第5集）の参加者は337名であったが、平成20年度版の第6集は209名となり、以降、第7集は158名。第8集は118名と減少傾向に歯止めが出来なかった。

その原因は以前から言われているように、協会会員の高齢化と死亡による減少。又社会情勢の変化として定年の延長、女性の職場進出、趣味の多様化により俳句に取り組む年齢が60歳～65歳以降になり協会に入る機会を失する人が少なくありません。合同句集は協会の重要事業でもあり、会員相互の生き方、作句の啓蒙に繋がることと思います。今後も継続して取り組んで行きます。

次に県民文化祭文芸作品公募作品の応募者句数をみると、平成10年の1419句を最高に、平成12年に1000句を割り、平成20年より500句を前後していたが、平成28年には412句、昨年は385句となった。これらも合同句集の減少と同じような傾向を示している。

ジュニア部門の出句は平成19年よりはじまり最初は30～50句から21年には118句、22年には228句となったが150句まで減少し平成26年には327句、平成29年には341句に投句数が増加している。その減少や増大の傾向の裏には指導される先生方の転勤が大きく関わり、先生方の熱意が児童生徒に伝わっているように思われる。また、公民館活動での児童生徒とお年寄りとの交流として俳句会などの活動の場があればと思う。

高校生には俳句甲子園が毎年出雲市で開催されている。

出雲部の平田高校、三刀屋高校が参加し、石見部から浜田商業高校が参加したこともある。高等学校においても入学する生徒の減少に伴い文芸部員の減少が問題となっているようであるが、指導者の先生方の熱意に敬意を払いたい。

つぎに県内の結社の月刊俳誌は、出雲、山陰、白魚火、城、地帯改名ひこばえ（季刊誌）が存続している。前回は名前を連ねていた石見、勾玉、夕焼は廃刊となっている。

山陰誌は30周年記念大会を6月に開催した。城誌は10月に創刊90周年記念大会を開いた。それぞれの俳誌が特色を持って俳句研鑽の場としているが、俳句人口の高齢化とそれに結社や俳句会に加入しない自由俳人が増加している問題がある。結社に入って束縛されるよりも雑誌や新聞等に葉書で投句するマニアが増加していると言う。

中央紙の新聞選者の方に聞いた所によると毎週7000余の投句に一人で50枚以上の投句があり、自選が出来なくて選者に丸投げの俳句作者が多いと言う話しも聞いた。俳句会で基礎の勉強を繰り返すことは大切なことであろうと思います。少ない俳句人口で大会などではお互いに助け合う互助の精神も俳句会では大切になると思います。

各地の句会も後継者を育成していかないと会もそうですが、俳句作品そのものが無くなる傾向があります。結社もそれぞれ問題を抱えています、それでも嬉しいことは90歳以上の高齢者の方が毎月素晴らしい作品を発表されていることです。

後期高齢者の仲間入りは俳句界では若い方に属します。俳句作りは脳の前頭前野のほぼ全体を活性化させ、四則計算などの脳トレーニングより脳の血流がましたと言う研究もあります。俳句は視覚だけでなく風の音、若葉の匂いなど五感をフル回転させて詠むので頭の回転が早く感受性が豊かになります。健康で長生きをお互いに励まし合って生きて行きましょう。

終りになりましたが、これまで島根県俳句協会にご尽力頂いた皆様、特に故人になられた先輩諸氏に心からお礼を申し上げます。

島根県俳句協会 田中静龍

<川柳>

今年、平成30年（2018年）は県文芸協会が発足した昭和43年（1968年）から50年目ということで、この50年を振り返っての記録を纏めておこうとの事、しょせん私も川柳を始めて30余年、県の役に付いても10余年というところでの、報告と言う事ですので、多々不備の箇所もあるかと思うのだけど、お許し願いたい。

島根県教育委員会の指導と助言によって生まれた、島根県文芸協会の主催する、芸術文化祭が一つの契機となり、その啓発と作品募集等が刺激となって、昭和46年7月、島根県川柳協会が発足したのである。理事長に柴田午朗、副理事長に尼緑之助、常任理事に本庄快哉、吉岡通児が選任され、理事には西村早苗、錦織愚童、渡部八起、多納巷雨、田中登志、津川紫吻、中村雷音坊、久家代仕男、藤井明朗、坂本昇雲、木村三雷波、監事に原

独仙、古割舞吉という錚々たるメンバーを揃える事となった。昭和51年の川柳会報第4号によれば、会員数182名となっている。その後、昭和52年には、会員数も増え320名となり、県文芸の審査員としては、柴田午朗、尼緑之助、津川紫吻の三名が名を連ねていた。

昭和54年(1979年)には、本庄快哉の編集により、「島根県川柳作家年鑑」第1集(昭和54年版)が発刊され、203名の参加者があった。これは第9集まで続いたのだけど、残念なことに終えることとなった。また翌、昭和55年には、金村青湖の編集により、「島根県交流川柳誌作品抄」が発刊され、240名の参加者があった。これも第7集で終えることとなった。

昭和63年(1988年)、山根梶人が中国新聞に、「いずもいわみ文人列伝」として10名の柳人を載せている。これは島根の川柳人として忘れてはならない先人の名であるので、ここに載せておくことにする。村穂珍馬、米村あん馬、青砥可明、柴田午朗、尼緑之助、広江天痴人、津川紫吻、本庄快哉、笹本英子、勝谷山川児の10名である。

平成3年(1991年)恒松町紅の呼びかけにより「島根川柳塔まつり」が松江市で開催され、島根県内外より99人の参加者があり、第2回目からは「島根川柳まつり」と改称して続いていたが、これも第五回で終えることとなった。

平成11年(1999年)島根県民文化祭文芸公募作品の応募点数が、700点と今までの最高の数となった。前後しては600点越と多くの作品が集まって来ていたのだけど、残念な事に現在では600点弱となっている。尚、平成19年からは、ジュニアの部も開設されて、より充実したものとなったことは嬉しい事である。

発足以来、順調に行われていた川柳協会の運営が、いつの間にか、有名無実となり機能しなくなった。その何年かの間、川柳会は申し訳ない時代となり、他の文芸部門にも多くの迷惑を掛けることとなっていた。そのことに対して、何とかしなくてはという空気が各結社で高まり、平成13年(2001年)の7月に県内の川柳会の有志が出雲市で集い、「県の新しい組織をつくろう」という準備委員会を発足させ、翌年の平成14年(2002年)、新たに「島根県川柳連盟」を立ち上げる事となった。会長尼れいじ、副会長佐々木裕、長谷川博子、事務局長金築雨学、次長熱田圭詩朗、監査石飛水煙、福間秀夫、顧問柴田午朗、恒松町紅と決定し、13の川柳会が加入した。新しい県川柳会の発展へと向かって歩み出した翌年には、加入結社も20団体となりより強い結束となった。その後平成16年、佐々木裕、平成20年、金築雨学、平成24年からは、竹治ちかしと続いて現在に至っている。連盟の結成以来、5年に1度の文芸フェスタの担当では、平成21年は声楽家の大岩誓子さんを講師に、平成26年には金子みすゞ記念会の矢崎節夫氏を講師に呼び、他の部門からは、賞賛の声も頂いた。次回は平成31年となり、今から誰を講師に招いたら良いのか悩みの種でもある。

平成21年には加入結社が21団体と増加し、連盟の力を感じさせたのだけど、その後

は、加入団体の高齢化もあり、脱退や消滅が相次ぎ、これからの川柳部門の将来に黄信号が灯るという現実もある。

平成24年、島根県川柳連盟10周年記念大会が出雲市で開催され、113名の参加者があり、そこで恒松町紅、原章峰、佐々木裕、金築雨学の4名を川柳連盟の設立と維持の功労者として感謝状を送り、今後の川柳会の発展を誓い合ったのであった。

島根県川柳連盟 竹治ちかし

<詩>

50年は、二世代に近い年月である。昭和43年(1968)当時、第一線で活躍し、『島根県詩歌集』第一集で審査員や招待作家であった先輩詩人たちはほとんど鬼籍に入られた。当時、応募者側だった若い世代も、今や、+50歳である。次の世代にバトンタッチしなければいけないが、少子高齢化や活字離れの影響もあり、詩を書く人たちが減少しているのが現状である。

昭和40年当時は、全国的にも現代詩は活発で社会的な影響力もあった。島根詩人連合が発足した時の会員は53名で、会員以外の詩人を加えると80名くらいにはなっただろう。現在では会員は約半数に減少している。第一回の『島根詩歌集』の応募者は63名だったが、平成29年の『島根文芸』では21名、3分の1になった。高齢化、活字離れ、詩離れは全国的な現象で、流れを防ぎ逆転していくのは簡単ではない。

しかしこの半世紀間、詩を広く公募し、選考して選評と共に『島根文芸』に掲載してきた実績やそこから派生した影響は貴重である。それは人数の多寡だけでは量れない価値ある文化遺産である。

以下、「島根県詩人連合の主な活動」『島根文芸』 「しまね文芸フェスタ」について簡単に歩みをまとめてみたい。

昭和43年秋、第1回「芸術文化祭」が、「県民の芸術文化活動の振興」を目的に島根県教育委員会の主導で始まった。文芸部門では、県内から作品を公募して選考し『島根の詩歌集』に掲載した。63名の応募があり、金、銀、銅賞と佳作を発表した。初回でもあり、漢詩や新体詩、児童詩などもあった。選考委員には岡崎澄衛(石見詩人)、宮田隆(山陰詩人)、原宏一(光年)が依頼された。招待作品として選考委員以外に、栗間久、松田勇、吉儀幸吉が寄稿した。2回目から文化講演会が加わり、第一線で活躍する文化人を招いて出雲部、石見部の両方で開催した。中村汀女、岩宮武二、田宮虎彦、荒垣秀雄、駒田信二、下重暁子、篠田一士、田中澄江など、島根では先ず聞けない著名人の講演は歓迎され好評だった。

詩歌集の発行、講演形式は、昭和47年の第5回まで続いたが、官製主導だったために当初は反発もあった。しかし時機を得た有意義で求められていた行事だったので、大きな抵

抗はなかった。昭和47年11月に、短歌、俳句、川柳、詩、散文の5分野が結集して島根県文芸協会が発足し、官・民が共同して運営する体制が整い、現在に至っている。

新体制に対応するために、同年2月、大田市で島根県詩人連合創立総会を開催した。定款を承認し、第一期として理事長・田原敏郎、事務局長・田村のり子、理事・高田頼昌、高田正七、洲浜昌三、琴川輝正を選出した。会員は同人誌団体参加+個人会員制で、「山陰詩人」（松江）「石見詩人」（益田）、個人誌「二十五年」（斐川）が参加した。「光年」（出雲）やこの年6号で終刊した「擬態」（松江）次の年5号で休刊した「潮鳴」（隠岐）は参加しなかった。従来、松江、出雲と石見の詩人の交流はほとんどなく、対抗意識が強かった。「詩人は群れるものではない」という厳しい声もあった。

島根県詩人連合が発足したことによって、「島根文芸」の選者、招待作家推薦も理事会、総会で決定されるようになり現在に至っている。

「しまね文芸フェスタ」は6回～28回（平成7年）までは「島根文芸大会」の名前だったが、5分野が順番に担当し会長として任に当たる。午前中は講演、午後は分科会で、詩分野では、自作詩の朗読と合評が定着している。5年毎に担当して招いた講師は次のようになる。土井大助（昭52 浜田）、大田静一（昭56 浜田）、永瀬清子（昭61 松江）、和田健（平3 益田）、島田陽子（平8 松江）、中村不二夫（平12 大田）、安永稔和（平17 松江）、小森陽一（平22 浜田）、谷川俊太郎（平27 松江）。平成13年は散文が担当で松江出身の詩人・入沢康夫が講師だったが、大いに交流することができた。谷川俊太郎の時は詩人連合理事長・洲浜との対談形式で進め、途中で大田市演劇サークル劇研「空」の6名が谷川詩16編を朗読した。初めての試みだったが好評で、ここ数年減少傾向だった聴衆も倍以上でホールも満員だった。

島根県詩人連合は現会員は25名前後、毎年「島根年刊詩集」を発行し46集になる。会報は84号。一般の人から乖離し袋小路に入り込んだ観がある現代詩だが、詩の魅力を一般に知ってもらうために新たな試みが必要だと考えている。第1期以降の理事長・事務局長は次の通り。2期「 閣田慎太郎・岩本克幸（昭50年～53年）」3期「熊谷泰治・川辺 真（昭53～63）」4期「洲浜昌三・川辺 真（昭63～現在）」

島根県詩人連合 洲浜昌三

< 散文 >

昭和48年、島根県文学連盟は「日本海文学」「出雲文学」「山陰文学」の3つの散文系の文学結社によって結成された。ちなみに、創立当時の役員は会長池野誠、副会長福代包夫、隅田彰、事務局長州浜昭昌三、理事岡より子、南原清六、布施良一郎、琴川輝正、石田登、山本弘であった。

同年より、県文芸協会の参加団体として芸術文化祭（文芸部門）の開催に参画し、散文の招待作家及び審査員を選任し、県文芸大会に散文の分科会を設置して県文芸大会に参加

した。

翌年の49年には島根県文学連盟賞を制定し、島根県において小説、評論、随筆の分野で優秀作品を書いた者にその功績を讃えて贈ることにした。

昭和51年、「蛮族」が誕生して加入した。

昭和52年県文芸協会は10周年を迎えた。この年は、県文学連盟が県文芸協会の運営の担当の年であり、会長の池野誠が県文芸協会の代表理事に選任された。同年8月、浜田市で10周年を記念して第10回島根県文芸大会を開催、詩人の土井大助を招いて記念講演会、分科会を開催した。

同年、「山陰の女」が誕生、加入した。本文学連盟参加の文学団体は5団体となり、参加会員は100名を超えた。

昭和53年、連盟機関紙「文芸しまね」を創刊した。56年、「浜田文学」が加入し、傘下会員は200名に達した。

昭和57年、県文芸協会は25周年を迎えた。本県出身の直木賞作家難波利三を招いて浜田市田尾20回大会を開催した。地元で現地の実行委員会を組織した最初の大会の記念講演会には約600名が参加した。

平成4年、県文芸協会は25周年を迎えた。第25回記念文芸大会は本県出身のスバル賞作家松本裕子を招き、松江市で記念講演会、シンポジウム、分科会などの記念事業を行った。

平成7年池野誠、石丸正、古浦義己が発起人になって「山陰文藝」が誕生した。同誌は全分野を含む総合文芸誌で、参加者はベテランから初心者まで。山陰地方の文筆を志すすべての人々に場を提供することをコンセプトにして、山陰特有の文学を創造しようとして活動している。

平成9年、県文芸協会は30周年を迎えた。本連盟の担当で、益田市で作家の夏樹静子、内海隆一郎、文藝春秋文芸振興部長高橋一清の3氏を招いて、2日間にわたり森鷗外ツアー、前夜祭、記念講演会、シンポジウム、文化会等を行った。延べ参加者数は約1200名で、「しまね文芸フェスタ」の歴史上で最高参加者を記録した。

平成14年、島根県文学連盟は「文芸フェスタ」担当として詩人の入沢康夫を招いて安来市で、平成19年、作家の佐藤洋二郎を招いて大田市で大会を開催した。

平成23年、本連盟は講師に作家、日本ペンクラブ会長阿刀田高を招き、松江市の島根県民会館で「しまね文芸フェスタ2011」を開催、午前の全体会議で「神話と文学——古事記とギリシャ神話」の演題で講演いただくとともに、午後の分科会では同氏を囲む文学談話会を開いた。

この間、平成26年、山陰文芸協会は松江市の島根県民会館において、東京大学名誉教授で小泉八雲研究家の平川祐弘を招いて創立20周年記念「ハーン没後110年シンポジウム」を開催した。

平成28年、本連盟は「しまね文芸フェスタ2016」を担当し、江津市に直木賞作家難波利三を再び招き、「石見文学の可能性——『石見小説集』について」という演題で講演していただいた。

島根県文学連盟 池野 誠